相星雅子の「引揚げ文学」とその反戦平和思想

疋田京子

キーワード：相星雅子、満州、引揚げ文学、定住者と非定住者、加害と被害

はじめに

「引揚げ文学」という概念を提唱する朴裕河（パク・ユハ）は、「慰安婦」問題は現代日本社会に大きな衝撃を与え戦後がまだ終わっていないことを明らかにしたが、植民地・占領地の日本人の「被害体験」であるはずの「引揚げ」が問題にならなかったのは何故か、と問いかける（朴 2016）。まず考えられるのは、それが植民者たちの物語、「加害者としての日本を含む物語」であり、日本人の受難の歴史として公に受け止められる余地がなかったという理由を挙げることができる。

しかし、「引揚げ」という事態は、植民地・占領地との関係だけで考えられるものではなく、「内地（＝本土）」との関係、植民者・引揚げ日本人同士の関係で考えなければ全容は見えてこない。そこで朴は、「引揚げ（＝帝国時代）の忘却」を強いる戦後日本社会で、帝国時代の記憶にこだわり続け、「戦後日本」に対する違和感を抱き続けた「引揚げ作家」たちに注目し、その作品を「引揚げ文学」と命名して、「引揚げ」という事態の全容を明らかにしようと呼びかける。対象としては、親の世代が朝鮮や中国など「外地」へ渡り、そこで生まれ育ち、敗戦後に日本に引揚げてきた「引揚げ二世」たちが中心で、その作品が提示する政治的意味と問題を正面から受け止め考察しようというのである。そして朴は、引揚げの全容を明らかにすることは、自らの中に潜んでいる政治に無自覚なまま内向していく日本近代文学に風穴を開けるのではないかと夢想してもいる。私自身は文学研究者ではないが、フェミニズムが「個人的なことこそ政治的なこと」と主張したことと軌を一にした、「文学はどのような意味でも政治から自由ではありえない」という朴の夢想にまずは乗ってみたいと思う。

ここ鹿児島にも、旧満州の日常や満州からの引揚げと戦後日本への違和感など、「帝国時代の記憶」にこだわり、多くの小説を書き残した作家がいる。2019年３月12日に亡くなった相星雅子である。その訃報を知らせる南日本新聞は、彼女の文学者としての功績を、長年エッセー教室の講師を務め、かごしまペンシルクラブを主宰し、鹿児島の文学の底上げを図ったと評している。その一方で、相星は「かごしま九条の会（2005年）」や「県戦争をさせない 1000 人委員会（2016年）」の呼びかけ人、市民運動から立候補した女性議員の後援会長を引き受け、反戦平和と女性の地位向上に尽力した活動家でもあり、私にとっても身近な作家だった。しかし、平和運動家の間でその「文学作品の中に提示された政治的メッセージ」を正面から受け止めることはなされてこなかった。「差別への怒り、反戦・平和、憲法擁護という自らの信念を文章の核として盛り込んできたことを、物書きとしてのささやかな自負としてきた」（相星 2005）と相星自身が書いているにもかかわらず、である。しかも、相星は、引揚げ日本人女性たちが晒された性暴力、ジェンダー化されたセクシュアリティに向き合った小説「下関花嫁」を書き、第18回南日本文学賞を受賞してい

るのである。

「その時子どもだったこと」にこだわってきた相星の文章の中には、子どもながらに全身で受け止めた大人たちの「あの戦争さえなかったら」と言う苦悩と新憲法とを結び付けているものも[1]ある。しかし、「アレ（憲法）があれば、もう戦争は起こらないのだろうか」[2]とも問いかけている。相星が物語る「引揚げ体験」は「戦争体験」に回収できるものではなく、相星が描く人間は、被害と加害が複雑に交錯している。「引揚げの記憶の忘却」を強いる戦後日本・鹿児島の社会の中で、相星が小説を書くことによってたどりついた「反戦平和思想」とはどういうものだったのか。本稿は、引揚げ作家としての相星が、その作品の中に残した反戦平和思想の政治的メッセージを、平和運動に伴走した者として解読する試みである。なお、その足跡をたどるために相星の略歴を本稿の末尾に付している。小説の執筆時期と出典については、それを参考にしてほしい。

Ⅰ.「その時子どもだったこと」へのこだわり：内地との関係

相星は、日本が中国との全面戦争に突入した1937年に満州の港町大連で生まれている。４歳で内陸部の奉天に移り、敗戦を迎えたときは７歳、国民学校の２年生だった。その後、父母と兄弟の８人家族で奉天から葫蘆島まで行って日本への引揚げ船にのり、博多港に上陸して両親の故郷である鹿児島にたどりついたときは８歳だった。敗戦と引揚げの時の年齢の違いは、「実際に何を見たか」という点でその後の思想形成に決定的な影響を与えている。相星自身も、敗戦後のごたごたと満州を記憶しえた最後の子どもであり、新憲法を喜び迎えた体験をもつ最も若い世代だと、「その時子どもだった」ことへのこだわりを何度も口にし、「幼い時の経験が、私の正義感、人生観のバックボーンになっている」[3]と述べている。

子どもの目に映った戦後日本・鹿児島：「みなみのポプラ」（1974）

資料展「引揚港・博多」の展示資料によると、敗戦時、満州には155万人にのぼる一般の日本人（開拓団や政府関係者、鉄道、鉱山関係者など）が残留していたが、17歳から45歳までの男子のほとんどは召集され、満州からの引揚げは高齢者や女性や子どもが多数だった。ソ連の参戦もあり、アメリカが占領した台湾や朝鮮の南部からの引揚げはスムーズだったが、満州や朝鮮半島北側からの引揚げは非常に困難で過酷なものだったと言われる。1950年代には、中国人による襲撃やソ連兵による強姦、凍死・餓死・集団自殺・子どもの遺棄などの生々しい体験記が多く刊行され、その証言が日本社会に大きな衝撃をあたえた。中でも、藤原てい『流れる星は生きている』は、新京（長春）からの引揚げの途中、北朝鮮で夫がソ連軍に連行され、３人の子どもと38度線を越えて日本にたどり着くまでの母親の必死の行動を描いた体験記で、映画化もされ、「引揚げ」についての日本人の記憶形成に大きな影響を与えた。この日本人引揚者の受難が強調されたモデルヒストリーを前提にすると、相星の記憶の中に在る相星家族の引揚げは恵まれていたと言えるかもしれない。敗戦後の現地での混乱の中でも売り買いをしながら食をつなぐ財産が何とかあり、出入りしていた中国人が敗戦後も食料を調達してくれたし、一旦は軍に召集された父も引揚

1　「その時子どもだったことの意味」（1983）相星（2005）pp. 318-321
2　「遠足物語」（1989）相星（2005）pp.346-363
3　満鉄若葉会『会報』p.37

げの旅では共にあり、一歳半上の兄と一歳半下の弟の誰一人も欠けることなく日本にたどり着いている。子どもであったがゆえに、トラウマになるような場面を見ないように守られていたのかもしれないが、相星自身、敗戦前後からの１年がかりの引揚げは、「七面倒な約束ごとに縛られる日常よりずっと遊び呆けられる絶好の機会」[4]であり「引揚げの旅を楽しんだ」とさえ証言しているのである。むしろ相星にとって、引揚げ者としての受難の記憶は、日本に引揚げてからの生活の記憶から始まっている。

満州で「一旗あげよう」と自らの意思で外地に赴いた親の世代とは異なり、満州で生まれ育った「引揚げ二世」にとっては、満州が生れ故郷であり、引揚げはそこからの強制的な「移住」にほかならなかった。「日本に帰りつきさえすれば」と大人たちに手を引かれた引揚げだったが、その目的地の内地は、そこが約束の土地だとは到底思えず、内地への期待は直ぐに失望に、日本社会への違和感は嫌悪へと変わっていく。相星の最初の小説集の表題にもなった「みなみのポプラ」には、その心情の変化が、国民学校５年生の少女・薫子の視線を通して、満州仕込みの標準語と村の人たちが使うコテコテの鹿児島弁を駆使してリアルに描かれている。

小説の舞台になっているのは、相星家族が鹿児島での最初の数カ月を暮らした祖父母の家がある伊集院だと思われる。Ｉ駅から村に向かう途中の三叉路にある村人の情報交換の場「みっつげ」で、誰かが目撃したと言う２人の引揚者姉妹の噂話から物語は始まる。大空襲にあって廃墟となった県都のＫ市とは違い、この村は何一つ壊されず残ったせいで、戦争に負けたことすら忘れかねない風情だ。明治・大正・昭和とこの村で生まれ根を張って生きてきた多くの定住者にとって、例外的に村を出ていった人たち（非定住者）の消息や新たな参入者の素性は格好の話のネタになる。特に女たちの結婚や再婚など異性関係は、本人にとっては過酷な状況を生き抜く選択だったかもしれないのに、「ふしだらな女」になった故だという方向に傾き、その女の像として村人の記憶に刻まれていくことになる。

「定住者感覚」に対する違和感と嫌悪

物語には、姉の由子に思いを寄せる美術教師の尾谷、由子に性的な奇襲をかけようとする村の若者たちや、仁王のごとく君臨する祖父の怒声と沈黙、それとは対照的に独楽鼠のように落ち着く暇のない祖母の従順さなどが心象風景を形作るものとして描かれる。異様ともとれる祖父母が、夜は二間きりの小さな奥の間でひとつ夜具のなかでよりそって寝るというのも薫子にとっては一つの不思議でもあった。その祖父母の姿は、あくまで子どもたちの父と母であった父母の姿とはあまりにも違っていた。子どもであるがゆえに、そのジェンダー化されたセクシュアリティを自分たちの両親の姿に重ねることができなかったのだ。

しかし内地の定住者の世界に対する違和感は薫子に引け目も感じさせた。満州から持ち帰った傘や長靴は、内地にはない洒落た高級品だったが、薫子は同級生の中で目立つことを恐れて、それを学校に着けていくことができない。よそ者が使用する言葉や持ち物、立ち居振る舞いは、その異質性を際立たせ、村の均質性に亀裂をいれるものとして差別の対

4　相星（2007）p.166。

象となる[5]からだ。さらに、その差別に貧困という要素が加わるようになる。薫子が病気を患い、その治療費を稼ぐために由子が工場の仕事を辞め繁華街のサロンで働き始めたのだ。自分の力で稼ごうとする由子と援助を申し出る尾谷の関係も性的緊張をはらむようになり、二人に対する心無い村人のうわさが薫子の耳にも入るようになると、薫子の内地への嫌悪は野火のように広がり爆発する。

おじいちゃんもおばあちゃんも嫌い、先生もお姉さんに変に優しくて嫌、人の噂ばかりしている人たちなんて大嫌い。人のこと引揚民だなんてなんだか観察してるみたいなお友達もイヤ。村は嫌い、内地は嫌い、みんな嫌い。　「みなみのポプラ」p.68

思い返せば、引揚船を降りて内地への感動の一歩を標した北九州の港町で、すでに自分たちに冷たい侮辱の視線が注がれていたことを薫子は認めざるを得ない。混雑のプラットフォームで「大変でしたね」とねぎらいの声をかけ荷物を持ってくれた制服制帽のりりしい大学生から、二人は母からの形見の貴重な荷物を盗まれた。村へ向けてというより内地そのものへ向けて燃え上がった反発によって、父母と共にあった揺籃の地満州への郷愁に薫子はとりつかれる。しかしその満州はすでになく、比較しようもないものだ。

薫子11才、日々音立てる速さで視野が広まり、朝ごとに目覚めは白々と明瞭度を増して。彼女の瞳はもう物事のうわっ面を映すばかりではない。奥にひそむものを見透かし始めた。そうして数えた、少しの歓びとおびただしい失望。

「みなみのポプラ」p.69

相星自身、敗戦・引揚げ・内地との初対面の季節という強烈な外因によって、「ふつうの子どもがふつうの状況下で迎える自我の出発・形成の時期が早められた」[6]と回顧している。相星は生前、田舎の自然が癒しとして称揚される風潮に対して、「私は街が好き」と公言して憚らなかった。最初に降り立った内地で芽生えた自意識と違和感・嫌悪は、田舎の共同体の閉鎖性を強く意識する心情を育てたと言えるだろう。

善か悪か：形のない敵との闘い：「終身刑」（1985）

鹿児島の都会と言える鹿児島市の子どもの世界にも、定住者と非定住者（地元の子と引揚者の子ども、受け入れた側と受け入れられた者たち、全体多数と少数）といった貸借感情[7]はあり、そこに貧困層か富裕層かといった要素が加わる。不遇感が極まると、その貸借感情は「善か悪か、敵か味方か」で二分する正義感を育てていく。小説「終身刑」では、同じ外地からの引揚者である同級生４人が、久しぶりにお茶を飲み近況報告をする場面が出てくる。それぞれの日常生活でうっかり鹿児島の基準から外れると肩身が狭いため、子どもの頃はクラスが違っても肩身の狭い者で寄り合い、共有する外地の世界の基準で鹿児島の言語や風習を特異なものとしてぐちをこぼし合っていた。子どもだったため、やがて鹿児島弁も操るようになり、主人公の麻子もいったんはすっかり鹿児島に同化していくのだが、どうしようもない貧困の現実を生きる中で父が病死し、麻子の中に「父を見殺しにしたもの、どれだけ働いても安住を与えず、命の瀬戸際でさえ労働に急き立てたものを許

5　朴（2016）p.42。植民地生まれの引揚者たちが日本に帰ってから出会った「祖国」における「内地」体験はきわめて複雑で、そこには「定住者の権力と転倒された差別」があると朴は分析している

6　相星（1989）p.225。

7　朴（2016）p.52。戦後日本の定住者中心主義は、引揚げ作家たちに、日本人を「原住民」（別役実）と眺め、自らを「在日日本人」と認識させ、書くことを「下宿料」（本田靖春）を支払う行為として認識させたと分析されている。

すまい」という形のない敵意が芽生える。成績の良さという切り札でクラスの権力を手に入れた麻子は、クラスの仲間を貧乏集団と豊かさと安定を誇る集団で二分して貧乏集団に有利になるように采配をふるう。この麻子の「思いやりと正義を装った密かな報復」はエスカレートし、クラスに深刻な対立を生み出し、担任の吉沢は、卒業式のクラス代表の役を麻子に与えないという方法で、麻子の切り札を粉砕する。

吉沢の制裁の真意を聞かないまま卒業した麻子は、鹿児島に空気のようにある「桜島不敬罪」に盾突きたい衝動にかられる大人になっている。ところがその正義感は、またしても粉砕される。しかも最愛の娘によって。麻子は、鹿児島から外の世界に旅立ちたいという自分が果たしえなかった夢を最愛の娘に託すが、娘が「あたし、鹿児島が好きなのよ」「あたしここで生まれたんだもの」と地元の大学の進学を決めたのである。

「罪名桜島不敬罪、判決終身刑」で終わるこの小説が書かれた時点で、相星が故郷を喪失した「余所者」としての自己認識を進んで受け止める「非定住者感覚」[8]を備えていたことは言うまでもない。むしろその「非定住者感覚」が相星を「書くこと」にせきたて、書くことによって「非定住者感覚」を自らのアイデンティティにしたのではないかと思う。

> めぐまれ過ぎていた在満時代と大きく一転した戦後との落差が、こうした（内地、鹿児島への）拒絶反応の素因に違いなかった。口惜しさも貧しさもみじめさも、すべてが養分となり胸のポプラは奉天のポプラをしのいで怪物になった。
>
> 「さよならポプラ」p.109

さらにこの時期、相星は、善か悪かの二分法で人を裁く正義感の偏狭さから抜け出し、善悪に分離できない人間の複雑さを理解する「少し大人」になっている。小説を書きながら、母が始めた喫茶店をフルタイムで仕切っていた相星は、生きていくために人がどうしようもなく備える「一見して相手の資力、権力、能力、時として腕力などをも推し測る第二の嗅覚」にあきれながら、横柄な言動をとる客に対し、「しがない店であればこそ無防備にさらけ出される人の姿がここにある。それを見つめる面白さをむしろ幸せだと思うまでに10年を要した」[9]と物書きの境地に達しているのである。

Ⅱ．呼び覚まされる「引揚げ」の記憶：引揚げ日本人同士の関係

引揚者の中には、中国に置き去りにされた多くの人たちの犠牲の上に、自分は生きて帰れたという後ろめたさを抱えて戦後生きてきた人は多い。引揚げの苦難のなかで犠牲になるのはまず子どもで、幼児が先に死んでいき、次は子どもを抱えた女性だったと言う。子どもが荷物のように置き去りにされる場合もあったが、このまま母子一緒に死んでしまうよりは、せめて命があるだけでもと、子どもを欲しがっている現地の人を探す母親もいた。そしてそれを女衒のように仲介する人もいて、子どもと引き換えに食料などを手に入れる人が出てくる。普通の生活にもどると、あの出来事は本当にあったのだろうかとさえ思え、心の裡に鍵をかけて語られることはなかったが、その記憶は残るようだ[10]。1981年から始

8　朴（2016）p.52。朴は、この感覚が「定住者」の世界に対する違和感、優越感、劣等感、引け目、不遇感に基づくものでもあり、感覚が引揚げ二世たちを書くことにせきたてた。

9　「指入りコーヒー」（1983）相星（2005）p.184。

10　引揚げ文学には、「日本人同士の生き残るためのエゴイズムや葛藤」も描かれている。それが単にソ連軍や「植民地」「占領地の人々」に対してのみならず、引揚げ者同士の加害・被害体験でもあった。朴（2016）p.97。

まった中国残留日本人孤児の「訪日調査」のニュースは新聞やテレビなどで連日報道され、相星に心の裡に鍵をかけていた記憶を呼び覚まさせている。心の底に沈めていた数々の記憶の断片を小説家の想像力でつなぎ合わせ、「置き去りにされた子ども」と「生きて帰った自分」とは無関係ではなかったかもしれないという思いをめぐらせ、小説３篇を相星は書いている。

命の管理者の選択：「遠い町」（1985）

敗戦から引揚げが始まるまでの中部満州のある都市を舞台にした小説「遠い町」は、自分たちの運命と中国残留日本人孤児の運命は紙一重だったということを相星が自覚する小説である。

小説の主人公は相星自身がモデルだと思われるチャコという女の子だ。チャコの家に出入りしていた中国人の朴が、「坊やを私にくださらんかね」と母にもちかける場面からストーリーが動き出す。「くださったら、うちとおたく親戚親戚、もう食糧ずっとタダヨ」と付け加えた朴に、「何を言うの」「そんなこと二度と口にしなさんな」と血相をかえる母。新聞も送電も滞り、ローソクや食糧などの生活必需品と物々交換される家財は次々と消えていく。日本人が頼るべき機関が無いなか、以前と変わらず荷物を届けてくれる朴は、一家にとって命綱だった。朴は母に詫びるが、子どもがいない朴が、弟のタクを本当にかわいがり、愛おしいと思っていることに嘘はなく、そのことを母も承知だ。満州の家に出入りする中国人と母との会話や、物々交換される生活必需品と家財といった子どもの目に映った生活のディテールの中に、満州都市部における植民者と被植民者の関係、貧富の格差、時局の変化を相星は書き込んでいる。

ある日、弟のタクと二人でお使いに行ったチャコは、帰り路で見知らぬ風景（おそらく中国人居住区）に迷い込み、家の方向をめぐって弟と意見が対立する。どちらが正しいか競争しようとそれぞれ駆け出し、チャコは先に帰りつくが、暗くなってもタクはなかなか帰ってこない。外は真っ暗になりチャコは不安になるが、母はいっこうに心配する気配がないのが解せないでいる。そこに母とのあの会話以来しばらく家に来なかった朴が小豆や米の粉を持ってくる。それを明るく受け取る母の姿。その傍らでチャコは怯え切ってキョトキョトする。なぜ母さんはタクを連れずに帰った私を怒らないのだろう―。またノックの音と足音が聞こえ、それがタクであることを願って全身の血が止まった、というところでその情景は終わる。もしかして母はあの夜、タクを自分の手から切り離し運命の手に委ねていたのではないだろうか――。大きな歴史の変化のなかで、子どもの命は、それを管理する大人たちの駆け引きの上でかろうじて生かされている。幼いながらに感じた置き去りにされる運命と紙一重のところにいる恐怖の記憶が、引揚げの記憶として確かに呼び覚まされた小説である。

抜き差しならない罪の意識：「光景」「結び目」（1986）

中国残留日本人孤児肉親捜しのニュースは、相星に引き揚げ船に乗った葫蘆島でのある記憶を呼び覚まさせ、その記憶を軸に、小説「光景」を書いている。主人公の温子は７歳で、長い無蓋列車の旅の目的地の葫蘆島にたどり着き、うれしさのあまり兄の制止も聞かず、弟を誘って群衆の足元を潜り抜け大型船に乗り込む。家族のために一番いい席を陣取ろうとしての抜け駆けだったが、家族はなかなか乗り込んでこない。まわりで聞こえるのは中国語ばかり。乗る船を間違ったことに気付いた温子は弟を連れ慌てて船を降り、間一

髪で母たちの居る引揚げ船に乗り込む。この出来事は実際にあったようで、エッセー「よみがえる海」(1998)[11]では、船が出港した後、相星は激しい船酔いでのたうち回りながら、子どもが一人見つからないという話を耳のどこかで聞き留めている。

小説では、新聞に掲載された中国残留孤児の名前を目にして子どもの頃のこの記憶がよみがえり、温子はいてもたってもいられず東京の兄に電話をかけて、兄の口からその真相を知らされる。居なくなったその男の子は兄の祥雄の同級生の家のそばに住んでいた子で、弟の貞二とよく遊んでいた。待合所で温子と貞二が早く船に乗ろうと人波をくぐった時、その子も二人のあとを追いかけ、それを兄は目撃していたのだ。名前は「タキガワセイジ」。新聞に掲載された中国残留孤児紹介の名簿では「タチカワテイジ」だが、名前を問われて４歳のまわらない舌で「タチカワテイジ」と答えたのだろうというのが兄の推測だった。しかし、引き揚げ船の中で、セイジの世話をしていた大人たちから「あの子を知らないか」と問われた時、とっさに「知らない」と答えた兄は、そのことを温子に確かめないまま記憶の底に沈めていたのである。それを知った温子は、幼い男の子が、ハルコターン、ハルコターンと泣き叫びながら船内をうろつく光景が頭から離れなくなり、４歳の孫を、４歳の男の子の命を確かめるように抱きしめるのである。

引揚げの旅の記憶を書いた相星の小説は、どこまでが実体験でどこからが想像力を膨らませた世界なのかを知りたくなるものが多い。今後、取材メモなどが整理され相星雅子研究が進むことを期待するが、この小説は、引揚げ者として差別された被害者としての自分も、生きて帰れなかった人たちの記憶を封印したまま生きてきたのだという、自らの加害者性を見つめる批判的想像力によって書かれている。

Ⅲ．引揚げの中で「女性の身体」を生きるということ

1990 年に南日本文学賞を受賞した「下関花嫁」とその姉妹編である「文字の花嫁」は、それまでの作品が悪夢や罪悪感を記憶の底からえぐりだすように書かれたのとは対照的に、「自然の力にあずかったとしか言いようがないくらい」「少しの苦労もしないで誕生した」と、受賞直後出版された『下関花嫁』のあとがきに相星は書いている。その自然の力とは、満州の引揚げ体験者である３人のＦさんからもたらされたものだ。幼なかった相星には「到底まなこに写しえなかった特異な世界」で、敗戦後の混乱の中、真っ先に性暴力の標的になる未婚の女性たちが性被害を防止するために、「仮の結婚」をして既婚者を装ったという証言である。その特異な世界とは、敵国兵士からの直接的暴力ではなく、自国の社会的・文化的な構造的暴力であり、家父長的なジェンダー規範のなかで「女の身体」を生きる大人の世界の性的緊張（セクシュアリティ）と言っていいと思う。

生きるために死なせる女の尊厳：「敗北」（1979）「旅姿・赤ん坊」（1991）

1990年代に「慰安婦」問題が日本社会に衝撃をもたらしてから約30年。日本人引揚者も含む戦時性暴力の研究は大きく進展している[12]。その対象は満州に入植した開拓団が中心で、2013年に当事者女性が「開拓団が生き延びるために幹部からソ連軍将校との性交を強

11　相星（2005）pp.25-27

12　その一つの集大成として、上野・蘭・平井『戦争と性暴力の比較史へむけて』岩波書店（2018）がある。本文での満州引揚者の性暴力被害に関する記述は、この中の猪股祐介「語り出した性暴力被害者―満州引揚者の犠牲者言説を読み解く」の分析に多くを負っている。

制された」ことを語ったことによって大きく進展した。それまでにも、ソ連侵攻後の満州では多くの日本人女性がソ連兵に強姦されたという証言は膨大にあり、「隠された記憶」というわけではなかったが、それは見聞きしたという伝聞の形の証言であった。

当事者の証言によると、「接待」を命じられたのは未婚の女性だけで、女性を選別する際に出征兵士の妻は除外され、不在の男性団員との絆（ホモソーシャルな絆）が優先された[13]。その「接待」と引き換えに、ソ連軍は団幹部の要請にしたがい、暴徒化した現地住民を鎮め、開拓団に食糧を提供し、開拓団は生きて日本に帰ることができたが、引揚げ後、その「接待」の実態は関与者の間で封印された。彼女たちを守るためだという発想からだったが、それは接待を強要した団幹部の責任を不問に付すことにもなった。被害女性の犠牲のおかげと位置づけるようになってからも、「接待」の実態には一切触れず、「開拓団のために」と被害女性が主体的に選択したかのように語ることで、「接待」の強制性を否認し、「献身」を顕彰することで、言葉にならない彼女たちの「痛み」や「恨み」を封印したのである。

相星の小説の中にも、直接的性暴力をテーマにしたものがいくつかある。初期に書かれた「敗北」では、記憶の底に沈めたはずのソ連兵による強姦の記憶が、平穏な生活の中でも音や匂いや手触りといった身体感覚としてよみがえり女性の人生を支配し続けるという、戦時性暴力の被害者の PTSD をとりあげている。しかし理不尽な暴力の被害者が、戦後の日本社会の中で平穏に生きていくには、被害の事実を（とりわけ夫には）隠し通さなければならなかった。強姦という犯罪の被害者であり、被害者にとって理不尽きわまりない暴力であるにもかかわらず、「死なずに帰ってきたこと」を「キズモノになった」と責められる。あるいは性暴力の被害者であることが、ふしだらだったから（抵抗しなかったから）と被害者の有罪証明として機能する。そこには「貞淑／処女の女性」と「ふしだら／キズモノ」とを分断する家父長的ジェンダー規範があり、それが組み込まれた戦後の日本社会の中で生きるには、「貞淑な・処女」を装うしかなかった。

一方、「下関花嫁」の後に書かれた小説「旅姿・赤ん坊」では、ソ連兵から凌辱される危機を回避するために他人の子どもを借りたという体験を、妻が夫に語る場面がでてくる。「子どもを借りる」という手段を選んだのは、どこの国の兵士でも泣く子には勝てないはずだから、「遠慮せずに、その時は子どもの尻を思いっきりつねって」と、２人の子どもを連れた女性に促されてのことだった。主人公がその引揚げ時の体験を夫に語ったのは、寝言で「ススム」という男の名を口走ったことに夫が抱いた疑惑を解くためで、「ススム」というのはその時借りた男の子の名前だった。実際には、主人公は、「そのとき」子どもをつねって泣かせることができなかったのだが、それを知らない夫は「その子が泣いたおかげでキズモノをつかまされなくてよかった」とうそぶく。夜ごとに繰り返し夫が漏らすその言葉は、まさに凍えあがる性暴力被害者をもてあそぶ二次加害そのものだ。内面化された家父長的ジェンダー規範によってしか女と対峙できない夫は、妻にとっては尊厳を踏みにじり続けるジェンダー暴力の加害者でしかない。

平穏に生きるためと諦めて自らの尊厳を死なせるのか、それとも反旗を翻し一矢報いるのか。相星は主人公に後者を選ばせる。主人公は、夫に抱かれ続けることで怒りを育て、

13　さらに未婚女性は家長（団幹部）に「接待」を強要されれば拒めないという家父長制もその背景にある。

しっかりと全身に叩き込み、渾身の力で夫を弾き飛ばして離婚を切り出すのである。

「女性の身体」に刻印される性被害：「下関花嫁」（1989）

第一小説集『みなみのポプラ』のあとがきで、相星は、小説の中に主人公を凌辱するソ連兵や、姉妹の母をもてあそぶ中国兵、中国人やソビエト人による陰惨な事件を書いたことが、「なにか中国人やソビエト人ばかりを非難しているようにも、悪役として利用しているようにも誤解されるのではないか」という不安を吐露し、日本の加害者責任に殆ど触れられなかった[14]ことを、作家としての未熟さだとも書いている。そのためか、日本人引揚者同士の性的緊張を描いた「下関花嫁」「文字の花嫁」では、被植民者の加害、植民者の被害という構図から解放され、活き活きとストーリーを展開しているように思える。また、その解放感は、相星が直接目にした記憶を素材にして物語を構築していることも要因の一つかもしれない。相星の記憶にある満州の風景は大連や奉天などの開発された近代都市であり、黒川開拓団が経験したような、現地の中国人農民による津波のような「襲撃」は相星の直接的な記憶の中にはないと思う。むしろ開拓団が「襲撃」から逃れて難民となって押し寄せたハルビンや奉天などの風景が、相星の敗戦時の記憶の風景である。

「下関花嫁」は、朝鮮国境付近の「通化」を舞台に、「大きな政治の歴史」に翻弄される人間の痛みを描いている。通化とは、日本の本土決戦と同様に、武器を自給自足しつつ最後の一人まで徹底抗戦するための極秘計画「光建設」[15]が進められた地である。小説の前半は、「光建設」を担った満州製鉄所で働く19歳の晴子と千波、企画部設計室で働く綾部と雨水の４人のプラトニックな恋愛が一つの核になっている。絶望的な戦況のなか、満鉄傘下の企業の一室で芽生えた若いカップルの恋、その楽し気で少し知的な会話と、それを微笑ましく、愛おしむように眺めている設計室の上司や同僚たち。やがて通化に関東軍の部隊がぞくぞくと集結し、綾部と雨水は応召され、難民が逃げ去った後の最前線の地域に捨て駒のように派遣されてしまう。雨水が千波に書いた手紙の中には、戦争の空虚さ、戦争という「大きな歴史」に翻弄される人間の痛みと、君にはどんな事をしてでも生き抜いてほしいという思いがつづられる。

日本の敗戦が明らかになり、戦勝国の兵隊は戦利品としてまず独身女性の差出を要求してくるのが常道だから、80数名の全員が独身の女子寮は真っ先に狙われると、悲嘆と恐怖の中で生存戦略の話し合いが行われる。凌辱をうけるくらいなら舌をかみ切ると気色ばむ者、舌をかみ切ることなんてできないと泣き出す者もいるなかで、社員互助会から提案があったのが「下関結婚」だった。その偽りの結婚の相手となるのは男子寮の住人で、その多くが内地に妻子を残してきた妻帯者で、それは引揚げの旅の目的地である下関で終わることは了解済みの関係だった。２人はギリギリになって男子寮へ走りこみ、千波の相手は松江の人、晴子の相手はあの設計室の主任の要助で、晴子と要助とは兄妹のような関係がしばらく続く。

14　「下関結婚」では、戦勝国の兵隊が独身女性の差出を要求するのが常道という判断の根拠として、「かつて日本軍が中国各地で行ったであろう常道が、報復としてまもなく自分たちに降りかかってくる」ということを書き込んでいる。

15　「光建設」や「通化事件」については、『秘録大東亜戦史 満州編下』（富士書院）が参考文献としてあげられている。この資料は、相星の父の満鉄養成学校時代の同窓生の息子の東京のＦさんが送ってくれたものだと、『下関花嫁』のあとがきに記されている。この「光建設」の地下施設の遺構が発見されたことを、2019 年 3 月 3 日の朝日新聞が報じている。

やがて予想通りの暴動や襲撃、ソ連兵の暴行事件、武装解除された関東軍の兵士が丸腰でシベリアに送られ、ソ連が去った後の通化では中国国民党軍と中国共産党軍との覇権抗争があり、1946年２月３日には日本軍が武装蜂起して制圧される「通化事件」が起きる。蜂起に参加さえしていなかった一般市民も逮捕・虐殺されており、要助も連行され瀕死の状態に陥る。そんな生死の境を共に生き延びるなかで、二人の結婚は実質的な結婚へと移行する。

下関結婚によって妊娠した千波は、引揚げ船の中で危険な中絶手術を受け命を落とす。当時非合法だった中絶が、引揚げ女性たちに対して組織的に行われていたことは、福岡県の二日市保養所や佐世保引揚援護局を中心に早い時期から明らかになっている（上坪1993）。小説の中にも登場するが、当時、引揚げ船内で女性の引揚者に配られた実際のビラ[16]は下記のようなものだった。

> 万一これまでに「生きんが為に」又は「故国へ還らんが為に」心ならずも不法な暴力と脅迫に依り身を傷つけられたり、又はその為身體に異常を感じつつある方には再生の祖国日本上陸の後、速やかにその憂悶に終止符を打ち、希望の出発点を立てられる為に乗船の船医へこれまでの経過を内密に忌憚なく打開けられて、相談してください。…上陸後は知己にも故郷へも知れない様に博多の近く二日市の武蔵温泉に設備した診療所へ収容し健全なる身體として故郷へ御送還する様にしておりますから、臆せず、おそれず、御心配なく直ちに船医の許まで御申出ください。

未婚の女性の妊娠は、それが強姦や抑圧下でなされた売春であれ下関結婚であれ、女性の身体に刻印された「性的スキャンダル」だ。田舎の共同体の懲罰的暴力に結び付くことは明らかで、その女性の身体を、「健全なる身體」として故郷へ帰すために、女性を救済するという発想で「非合法の中絶」が行われたのである。

身体化された「恥と汚辱」の記憶：「文字の花嫁」（1989）

「下関花嫁」の姉妹編とも言える「文字の花嫁」を、私は「下関花嫁」より先に読んだが、今でもその時の衝撃を忘れることができない。それが引揚げ時の「排泄」をめぐる物語ということに度肝を抜かれたからだ。どんな状況下であっても、「排泄」は生きている人間であればのっぴきならない生理現象であるはずなのに、引揚げ船に乗るまでの無蓋列車に乗った移動の最中に、それをどうしていたのか記憶が全くない、という主人公の驚きから小説は始まる。

満州からの引揚げをテーマに小説を書き始めた女性作家である主人公の元に、差出人の名前のない長い抗議の手紙が届いたことがきっかけだった。その手紙によると、その差出人（名無しさん）も満州で生まれ育ち、生涯で一度の良き時代を過ごしたという。ところが、当時18歳だった彼女にとってのハルビンからの引揚げの旅は、かの地を懐かしむこともできないほどの「恥と汚辱の旅」なのだと言う。それを、「あの頃まだ子どもだった世代が、ままごとのような記憶を元手に、小説という形に広げてまで、埋もれかけている悪夢を引きずりだすなんて」と手紙は抗議する。名無しさんが「ルリ子」という名前であることは後で明かされるが、手紙では、その埋もれかけていた悪夢、恥と汚辱が「その人の引揚げの真実」として語られる。

16　資料展「引揚港・博多」の展示資料より。

ハルビンからの引揚げの途中、鉄道事故で目の前で母を突然失った彼女は、引揚者の集団のなかで茫然自失して生きる気力を失っていた。そこで出会ったのが、幼い二人の子どもを連れた「あの人」である。一つ年上で、子どもたちは姉夫婦の子どもだが姉夫婦の消息がわからず、九州の実家まで送り届けるところだと言う。子どもを挟んだやりとりの中で、いつしかおままごとのお父さんとお母さんのような役回りを演じるようになり、そこに「文字の結婚」という形式が加わるのだが、そこにあるのは「下関花嫁」の千波と晴子のように貞操の危機といった緊張感ではなく、嫁入り前の「恥じらい」とも言えるものだ。「下関花嫁」では、そこに愛情や実質的な夫婦関係があっても、正式な結婚に移行する余地がないゆえに、千波は中絶という選択をせまられる。しかし、「文字の花嫁」に登場する２人は未婚の男女で、それが正式な結婚に移行する可能性は充分にあり、二人も、日本に上陸した後の幸せな暮らしをほのかに思い描いている。

そんな引揚げの旅の中で、悪夢の出来事が起きる。相星はこの小説を、「いわば霊の言葉を口にのせるという霊媒のように、事実の重さにつき動かされて、夢中でストーリーを立て、流れるようにペンを走らせた」[17] と言い、「物語の核となったシーンがすごいのである」と、そのすごいシーンがＦさんからもたらされた証言であることを示唆しているが、そのシーンとはおそらくここからである。

奉天から葫蘆島までの無蓋列車の旅では、暴徒の群れが出没する区間では列車を停車できず走り続けなければならなかった。駅はおろか道端にも止まる気配のない機関車の中で、「ねえオシッコ」とか「ウンコしたい」という子どもたちの待ちかねる声があがりはじめる。子どもであればこそ粗相も許されるが、大人、しかも大人の女にそれが許されるわけもなく、女性たちは、「夫が、まるで幼児にオシッコをさせるように、背後からその両脚を持ち、抱きかかえて縁の外に差し出し、婦人が用を足す間を渾身の力で支える」ことで失禁という恥辱を免れることができた。ところが、実質的な夫婦になっていない二人の間では、それを言い出すことは「この世のものとも思えぬ恥」だ。しかも二人の子どもの用を足させてあげたあの人は、まるで私にはそんな生理現象なんて存在しないと思っているような明るい目をしている。失禁の恥辱と引き換えに、恥を忍んで最初にあの人にオシッコを頼んだあと、二度とそんなことにならないようにと飲食を控えるが、限界まで達して喉と胃袋のしもべとなり下がり・・・。あの人は「おなか痛いの？」「セイロガン飲んだ方がいいよ」と気遣ってくれる。

> しかし、すべての願いは無に帰しました。再び同じようなポーズで、私は腐敗した水便を空中にまき散らし、強まってきた夕刻の風の中で飛沫はあの人の手や腕にかかり、はね返って、まくり上げたあの人のシャツの袖に、黄土色の忌まわしいシミをつくりました。赤く染まり始めた平原の彼方の空に、カラスが黒い斑点を作っていました。このままこの人と飛びたってカラスになれたらと思いました。カラスなら、空を舞いながらフンをばらまいても、恥ではないのですから。　「文字の花嫁」p.25

引揚げ船が満州から遠く離れるにつれその恥辱も少しずつ薄れ、なんとか気持ちを立て直した二人だったが、上陸の際に行われた検疫が、二人が正式な結婚に移行する可能性をまた閉ざしてしまう。その検疫とは、船の一隅に張った幕の間からお尻を突き出し、ガラ

17 「『下関花嫁』に込めた想い」相星（2005）pp.241-243。

ス棒を肛門に差し込むという原始的なもので、女の人の検疫は夫がすることになっていた。そうとは知らず彼女は検疫を受けたあと、あの人の顔が明らかに強張っているのを発見する。事実を確かめ、「ごめんなさい」「そんなことない」「ひどい役目ばかりおわせてしまったわ」「気にしなくていい」と力なく交わされる会話。上陸後、収容所の３日間を過ごしたあと、二人は西と東に別れた。直接的暴力の脅威から解放されたにもかかわらず、後に残った身体化された「恥と汚辱」の記憶の故に、である。

作家の住井すえは、御陵の便所から人々が天皇のそれ（うんこ）を拾って家宝にするという話を聴いて、「天皇も同じことをするという事実」を知り、それが人間平等思想の原点になった[18]と言う。そういう意味で「排せつ」は、天皇を頂点とした家父長制の幻想を暴くものだが、その人間の最も無防備な行為を人前に晒さないことで人間の尊厳が保たれていることも事実だ。二人の間には、「下関花嫁」の晴子と要助のように、死の恐怖の中で、セックスという最も無防備な関係を結び共に生き延びた、同志のような絆はまだなかった。「下関花嫁」で、晴子は自分が妊娠していることを上陸直前の船の上で知るが、中絶しないことを決意するのである。

Ⅳ．家族という単位の中の加害と被害の体験

「下関花嫁」は、中絶しないことを決めた晴子が、故郷の鹿児島に帰った後に母と交わすであろう会話を楽しく想像するところで終わる。妊娠していることを知ったら、おっ母はんは誰の子どもかと問うだろう。そうしたら何と答えよう。「このおなかには千人分の命がつまっているの」なんて言ったら、おっ母はんはわかってくれるだろうか―。そこには、閉鎖的で家父長的な村社会にあっても、共に生きてくれる母が居るという信頼がある。

相星の作品には、家族という単位で起こった出来事や喜怒哀楽の記憶が題材になっているものが多い。しかし、家族ほど力関係が渦巻き、支配をめぐる暗闘が繰り広げられる世界もない。特に母との関係は濃密で、小説「ミシン」（1994）、「めぐる暦」（1995）、「残菊」（2001）などは、母と心のうちを探り合う壮絶な駆け引きや感情の爆発、そのあとに残る複雑な思い、そしてふと蘇る母が漏らした言葉の記憶によって、自らの加害性に思い至る過程が丁寧に描かれている。

母との葛藤の中で生まれたフェミニズム思想：「めぐる暦」（1995）

引揚げてきた鹿児島での相星家族の生活は、父親が満鉄の社員で母は専業主婦という裕福な近代家族の生活から一転して、それまで築いた地位も財産もすべて失い、裸同然で一からやり直す生活で、それまで母が専業でやっていた料理や洗濯などの家事、弟妹の世話などの役割を長女の相星が担った。いっこうに楽にならない生活は父と母をいためつけ、面倒見がよく忍耐強かった父は相星が15歳の時に病死する。貧しさが極まる中、家長としてあった父の役割を母が、母が担っていた雑役を長女の相星が担わざるを得なかった。成績が優秀だった相星は大学進学を希望していたが、兄や弟妹のためにそれを諦めざるを得ず、甲南高校卒業後は九州電力に就職している。家父長的なるものを糾弾していた相星は、「長女の役割」を当然のように求めてくる母を憎悪する言葉を吐くことも憚らなかっ

18　日本近代文学館「向い風の中の曼珠沙華たちへ――「住井すゑ」の世界」https://www.bungakukan.or.jp/cat-exhibition/cat-exh_past/13909/

た。それでも、５人の兄弟妹たちが県外に出ていき、それぞれの道を歩むことを応援し、結婚後も母が始めた喫茶店エイトの仕事を担い、認知症になった母と壮絶な喧嘩を繰り返しつつ最後まで鹿児島で母と共に生きた。

母との葛藤を描く相星の小説の中で、「めぐる暦」は、引揚げの旅の記憶中の「微笑むうるわしい母」と、目の前で叱責の残酷度指数を更新する母と、その変貌の背景にある引揚げの旅の苦難を小説化したものである。相星の母は、「あんたのおかげで、とうちゃんは早死にしたのよ」など、かなり残酷度の高い言葉を高校生の相星に投げつけていたようだ[19]。そんな受難の生活の中で、蘇ったある幼い頃の引揚げの記憶を糸口に物語は展開する。

その幼い頃の記憶とは、博多から故郷へ向けて南下する駅の構内で、女の人が「子どもを返して！」「チイコを返して」と泣き叫びながら汽車の中にいる自分に手を伸ばしてくるというもので、それと同時に二人の女に左右から手を引っ張られて身体が引き裂かれる恐怖感がよみがえる。その記憶の真相は、主人公の憬子が子育てと母の店を手伝いながら小説を書き始めて十年が過ぎた頃に、引揚げの旅で一緒だったという父の満鉄時代の同僚の谷川からもたらされる。社宅があった営口からの引揚げで、谷川一家と憬子の家族の矢内原一家は、来る汽車来る汽車満員で列車に乗れず、歩いてでもとにかく安全地帯に脱出するほうが得策と考え歩行を開始した。身重の母と憬子と幼い兄二人からなる矢内原一家、まだ満足に歩けない一歳の千恵子をおぶった谷川夫人と二人の子どもをかかえた義妹からなる谷川一家。過酷な行程は、荷物の重みや背負った子の重みにあえぐ避難者たちを阿鼻叫喚の地獄に陥れた。やっとたどり着いた駅で谷川夫人がおんぶ紐を解いて幼児を下ろすと、背中に結び付けていたネンネコの中はもぬけの空だったのだ。絶叫してもと来た道へ走り出そうとする夫人とそれを必死で止める義妹。一方、憬子をおぶったり降ろしたりしながら十数時間を歩き通した母は、まもなく小さな赤ん坊を早産し、当時は死亡率の高かった産辱熱に見舞われる。高熱に浮かされた母から、オシッコだ水だと泣く小さな憬子の面倒をどうぞお願いしますと懇願され、谷川の義妹は、虚ろな目で這い出そうとする谷川夫人に、「ほらチエコが帰ってきたよ」「次の汽車に乗ろうね」と祈る気持ちで言ってしまったのだ。谷川夫人は狂喜して憬子を抱きしめ、千恵子をなくして宙にさまよった愛情を一年間ごっそり憬子に注いだ。「チイコ、チイコ」と勝手に名前を変えて憬子を溺愛する谷川夫人に、母は不安になり、そろそろ返してほしいと義妹に迫ったと言う。これが谷川から聞いた真相だった。憬子が「自分は母の胸に返りたがらなかったのか」と聞くと、谷川は一瞬口ごもりつつも、「谷川夫人を一番身近な人間だと感じているように見えた」という義妹の見解を伝えた。一年あまりの引揚げの旅は、母にとってはトラウマになるような悪夢だったのかもしれない。

「記憶を喪失したものが、しばしば人格を変えて別の人間を生きるように、母は引揚げの旅で、＜微笑むうるわしい母＞を喪失して、もう一人の母になった。旅にあって無邪気で残酷な背信を示した幼い娘を、彼女はやがてサンドバックにして、ぶっつけ本番で押し

19　「父にささげる十万の言葉」（1989）相星（2005）pp.233-235。このエッセーによると、母のその言葉に対し、そんなことあるはずないと口では抵抗しつつも、自分の行状を振り返り、心のなかでは「そうかもしれない」と打ちひしがれてもいて、父の愛した満州を核にした小説を書き始めたのは、モノを書くのが好きだった父への最善の償いだと思ったからだとされる。戦後の貧しい生活の中で、相星にとっての父親像は、子どもらしいわがままを言える甘えられる存在として記憶されている。

よせる不幸や生活苦と強く激しく戦い抜いたー」。「大したものだよ母ちゃんの人生」―。憬子がこの境地に達したのは、高校を出て働き始めてから、母を恐れなくなっていたことも要因としてある。似ていないようでいて自分と母はよく似ている。「時間に自分を追いかけさせて、はじめて獅子奪迅を演じられるやっかいな性質」という、母の本質を見抜けるようになっていた。

還暦を迎えたころ、相星は「子ども時代から50年近く、好きでもなかった炊事をしてきた」[20]と感慨深く振り返っている。相星は、長女であるがゆえに母に代わって炊事を担い、結婚後は妻・母として、テーブルにたっぷりの料理を並べ家族の反応を楽しみ、家族と過ごす行事をカレンダーにびっしりと書き込んでは、遊び心たっぷりの子育てをした。そのモデルとなっているのは、満州の記憶の中にある家庭の風景なのだが、それを仕切っていた母自身が炊事を好きなわけでも、計画的にてきぱき家事をこなすことが得意なわけでも、慈母観音のように子どもを慈しむ母性が備わっていたわけでもないことを、相星も働き始めてから知ったのである。女はみんな家事育児が好き、それが本性という性別役割神話の虚を暴くフェミニズム思想を、相星は母との葛藤のなかで身をもって知ったのだと思う。だからこそ「母とわたしは、いつまでたっても呉越同舟の間柄だった」と言えたのである。

「引揚げの旅を楽しんだ」という罪悪：「転生」（1977）「賤民」（1987）

愛憎相反する母親との関係だが、相星は、内側に激しさをかかえながら口数の少ない兄と、相星がいつも引き連れて一緒に遊んでいた一つ下の弟にも、特別の思いがあるようだ。エッセー「遠足物語」（1989）では、兄の前に曝した自らの行為の浅ましさ、薄情さを「悔んでも悔やみきれない思い」として抱えていることを告白している。鹿児島で両親が初めての商売を始めたころ、兄と相星と一つ下の弟の３人が伊集院の祖父母の元に預けられたが、居候には全く適さない相星は田舎にいるのは嫌だと駄々をこね、父母の元へと脱出してしまった。二人を残し、一人だけ母に連れられ村を出た日の、眉一つ動かさず見送る兄の顔と、「マコちゃん、遊っけ来っでね」と早くも上手くなった方言で叫んだ弟の声。また遠足のときに母が用意してくれたおやつ（キャラメルやビスコ、ボンタンアメ！おこしに酢昆布にウエハース）に、相星は「満州にいた時みたいだナ」と夜も眠れないほど興奮し、遠足先に訪ねてきた弟に「お菓子くれ」とねだられても、「ないない、全部たべちゃったもん」と言ってしまう。兄に「ノブっ、来いっ！」と促されてすごすごと去って行った弟ノブのいじらしい姿と、相星には一瞥もくれなかった兄のキッとした声。兄の眼を借りてみた自らの欲深さや冷酷さに相星は打ちのめされたのだ。相星は、この自らの内にある「悪」の記憶と、引揚げの旅を「子どもらしい興味や冒険心で楽しんだ」記憶を「罪悪」と感じているのである。

それ故か、相星の小説の中には、現実の世界とは全く別の世界を生きている自分を夢想する主人公が何度か登場する。小説「転生」の主人公アサは、その身なりとは似つかわしくないことが評判になるほどの成績の良さで、裕福だが成績がふるわない同級生の智恵子の家庭教師を務めている。アサの現実の世界とは、子沢山の引揚者で、その貧しさはどうしようもなく、いつも眉根を寄せている両親や押し合いへし合いしている兄弟たちといっ

20 「台所」（1997）相星（2005）pp.65-67

た、相星の少女時代にある世界だ。そして夢想する別の世界とは、ふかふかのベッドがある見慣れた智恵子の部屋なのか、風邪をひいて寝ていた満州の洋館の社宅の部屋なのかはわからない。その世界にいる自分を夢想する「アサの時間」は転生願望とでも言え、それを実行してみようとする。智恵子に借りた真新しい服やリボンで別人になりすまし街をあるくと、誰もアサだとは気づかず「お嬢さん」と声をかけてくる。ところが、アサが入り込もうとした世界は橋の下で命をつなぐ人たちの掘っ建て小屋で、西駅の鉄路のそばにあるアサの家と大した差のない世界だった。1977年に書かれたこの小説は、掘っ立て小屋の中の「無為をかこってたむろしている荒くれたち」を目にしたところで終わり、アサが現実の世界に戻ったことが暗示される。ところが、2007年に書いた相星の最後の長編小説「六月灯」では、主人公は荒くれたちの餌食になるという修羅をくぐり、川沿いにある掘っ建て小屋の夫婦の娘になって全く別の世界を生きることに成功する。しかし、現実の世界を捨て、母の絶望や、いつもつるんで遊んでいた弟の寂しさを顧みなかった天罰が、実の弟をそうとは知らずに愛してしまうという形で主人公に帰ってくる。

この２つの小説の間の1988年に書かれた「賤民」では、その転生願望が「流浪の民のような旅」への憧れとして描かれる。主人公のフミ子は還暦も近くなり、持病の心臓病を抱えながら時間に追われる日々の中で、大道芸人が朗々と歌う「あそべ、あそべ」「遊べ、遊べ」という声に吸い込まれつつも、逃げ出したい思いにかられる。それは現実の世界と別の世界との間で逡巡する姿なのだが、その別の世界とは、「その日々、一日一日の細やかな手順や規則から解放され、休む前にきちんと寝巻に着替える必要もなければ、早寝の必要すらない。いい成績をとる必要なんてさらされなく、ただ元気に遊んでいればよかった。それだけを望まれた」子ども時代の記憶の世界だ。子どもの頃の引揚げの旅は、フミ子にとっては「すべての余剰を取り去って、生活は生存そのもの」、しかも、行く手に心うきたつものがあり、「大人たちはそれを勝利とか祖国とか名付けていたけれど、子どもたちは、その名さえしかとは知らず、ただ明るい方へ手を引かれた」。そして、「命のそのままの姿で、よきものの方向へ歩くーーこの世の最も簡潔な渡り方」を幸か不幸か四十年前のあの時にしてしまったのではないかとフミ子はつぶやくのだ。

虐待やDVという言葉がなかった時代、転生願望は相星の「非定住者感覚」という物書きとしてのアイデンティティの発露だったのかもしれない。「どんな状況でも、人間の良心や希望を持ち続けられる単位は家族」であり、「文学は、その最も基本的な部分の変容を観察するジャンルでもある」[21] とすれば、相星は、自らの家族の変容を観察し、その関係におけるそれぞれの加害性と被害性を見つめ、小説として対象化することで、人間としての希望や良心を持ち続けようとしたのではないだろうか。

おわりに～相星雅子の反戦平和思想

相星雅子の「引揚げ文学」の軌跡をたどることで見えてくるのは、「その時子どもだったこと」へのこだわりとは、「その時大人だった人たち」への問いただしの眼を常にもち続けることでもあったということだ。その問いただしの眼は女性にも向けられ、そして大

21　断続的戦争状態にあるロシアと戦争構造に組み込まれた日本 それぞれの「戦争文学」とは
＜島田雅彦氏インタビュー＞：https://weekly-economist.mainichi.jp/articles/20220929/se1/00m/020/001000d

人になった相星自身にも向けられる。

相星は女性としての自らの加害性を常に見つめる批判的想像力を持ち続けた。この姿勢は、特攻の母として平和のシンボルだった鳥浜トメさんを取材したノンフィクション『華のときは悲しみの時』で存分に発揮されている。崇高な英雄としての特攻のイメージを壊すまいと忖度して、トメさんは兵士たちのいまわの日々の苦悩の姿を語ろうとしない。その心の底に隠している声を聞くために、相星は取材を続け、トメさんが終戦後、無残に壊れ錆びついている特攻機一機一機を撫でさすりながら「済まんじゃった、あたいがあの兵隊さんたちを殺したと。すまんじゃった、ガッチ済まんじゃった」と、泣きながら詫びてまわった姿を確かに捉えたのである。「そのとき大人だった人たちは、戦争をした日本という大集団についてはさまざまに反省やざんげの発言をするけれども、その集団を形成した個人としてのそれはめったに口にしない」。「特に女は、あの時代まだ参政権もなくて、男の論理で世の中が動いたという免罪符があるからか…相手の攻撃に逃げ惑う日々を送るいっぽうだったからか、責任感がいまいち薄いのではないだろうか」。夫や子どもを戦争で奪われることがどんなに辛く悲惨な悲劇であるかは言うまでもないが、「泣きごとも言わず非国民の汚名を着ることもなく出征するわが子を、どこかで安堵して送り出した加害の部分を女はけして忘れてはならないのだと思う」[22]と、大きな政治を形成した個人としての戦争責任は女も例外ではない。相星のこの反戦平和思想は、メディアでも取り上げられ、男性中心の平和運動の中でも広く共感を呼び、相星の反戦平和運動での活躍に結びついている。

自らの加害性を見つめる相星の批判的想像力は、夫婦関係や娘との母子関係のなかにある「支配をめぐる暗闘が繰り広げられる世界」にも向けられた。本稿では触れられなかったが、そこからの政治的メッセージの分析にも今後挑戦してみたいと思う。反戦平和思想を育んだ相星の「引揚げ文学」が再評価され、共有され、平和運動のあらたな突破口となることを夢想して。

22　「女の戦争責任」相星（2005）pp.324-332。

参考文献

朴裕河（2016）『引揚げ文学論序説 新たなポストコロニアルへ』人文書院
橋本明子（2017）『日本の長い戦後 敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか』みすず書房
末益智広（2019）「戦後日本社会における「引揚げ文学」と家族愛」『千葉大学人文公共学研究論集』38巻，pp.142-159
上野千鶴子・蘭信三・平井和子（2018）『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店
松原洋子（2019）「引揚者医療救護における組織的妊娠中絶―優生保護法前夜」、坪井秀人編『ジェンダーと生政治』臨川書店 pp.37-75
上坪隆（1993）『水子の譜―ドキュメント引揚げ孤児と女たち』社会思想社
加藤聖文（2006）『満鉄全史「国策会社」の全貌』講談社選書メチエ
山崎哲（2022）「中国帰還者の歴史をめぐる継承―メディアと三世―」『立命館言語文化研究』33巻３号 pp.117-127。
満鉄若葉会（満鉄育成学校同窓会）『会報』1989（平成元年８月）No.114
相星雅子（1989）『みなみのポプラ』三笠出版
（所収されている小説。下線は本稿で引用した小説）
敗北、夜汽車、みなみのポプラ、転生、白い花、分身、遠い町、光景、結び目、時代
相星雅子（1990）『下関花嫁』高城書房出版
文字の花嫁、木馬、下関花嫁、賤民
相星雅子（1992）『華のときは悲しみのとき　知覧特攻おばさん鳥浜トメ物語』高城書房出版
相星雅子（2005）『おそれたまえ百万人の隠れ王を』随筆かごしま社
相星雅子（2007）「六月灯（上）」『小説春秋』20号，pp.152-195
〃　（2008）「六月灯（中）」『小説春秋』21号，pp.120-151
〃　（2009）「六月灯（下）」『小説春秋』22号，pp.196-240

相星雅子略歴

	略歴	小説	詩・随筆・コラム等(抜粋)
1937 (S12)	10月23日、旧満州大連に生まれる。父は南満州鉄道勤務。6人きょうだいの2番目で長女。		
1945 (S20)	敗戦。旧満州奉天(現・瀋陽)で引揚げを待つ。		
1946 (S21)	8月、家族8人で伊集院の祖父母の元へ引揚げ。両親と弟妹3人は鹿児島市へ。		
1947 (S22)	春、西鹿児島(現・鹿児島中央)駅近くで両親と暮らし始める。中州小4年。新憲法施行の祝賀学芸会でダンス。		
1952 (S27)	12月、父死去。		
1953 (S28)	甲南中から甲南高へ進学。文学部所属。部誌『深海魚族』に詩を書き、高3の時、南日本新聞文芸欄に掲載される。		詩「感傷」「ひととき」「賛歌」(南日本新聞)
1956 (S31)	大学進学を諦め九州電力入社。		
1958 (S33)	結婚し退職。3児を出産、子育て。編み物や洋裁に励む。		
1963 (S38)	朝日新聞「ひととき」欄へ投稿を始める(～71)		朝日新聞「ひととき」へ投稿
1969 (S44)	母経営の喫茶エイト開店。手伝い始める。(～90)		
1972 (S47)	下伊敷の市営住宅から明和へ転居		
1973 (S48)	『原色派』に所属。小説を書き始める。	白い花(原題・花みょうが)(原色派11号)	
1974 (S49)		みなみのポプラ(原色派12号)	南日本新聞夕刊「月曜エッセイ」連載
1975 (S50)	『原色派』編集に関わり始める。	夜汽車(原色派13号)	
1976 (S51)			
1977 (S52)	喫茶エイトをフルタイムで仕切り始める。	転生(軌跡)(みなみの手帖20号)	
1978 (S53)			
1979 (S54)		敗北(みなみの手帖24号)	
1980 (S55)	鹿児島大学教育学部聴講生(～81)		
1981 (S56)			南日本新聞夕刊「思うこと」連載
1982 (S57)			南日本新聞「南点」連載
1983 (S58)		秋分記(原色派23号)分身(同24号)	
1984 (S59)		電話(原色派26号)	
1985 (S60)		遠い町(原色派27号)時代(同28号)終身刑(みなみの手帖44号)	
1986 (S61)		光景(原色派29号)結び目(同30号)皮靴(みなみの手帖49号)	
1987 (S62)	MBC 学園エッセイ・小説教室講師(～2019)	木馬(原色派32号)賤民(同33号)	
1988 (S63)	MBC 学園エッセイ・小説教室の作品集『さざなみ』(92年から『流域』)編集・発行。2018年まで年1回発行する。	十二月の町(原色派34号)	
1989 (S64H1)	初出版『みなみのポプラ』(三笠出版)	文字の花嫁(原色派35号)下関花嫁(同36号)	8月15日、MBC テレビ「きゅーと55」に出演。「伝えたい、私の戦後」のテーマでインタビューを受ける。
1990 (H2)	南日本新聞にコラム「おんなの言葉」毎日連載。「下関花嫁」で第18回南日本文学賞受賞。『下関花嫁』(高城書房出版)	少女の襁褓(原色派37号)柳行李(南日本新聞)	南日本新聞にコラム「おんなの言葉」を毎日連載。NHK 他のテレビに出演、引揚体験などについて語る。
1991 (H3)	『おんなの言葉　365日』(高城書房出版)	旅姿・赤ん坊(原色派40号)三階屋根裏部屋(みなみの手帖64号)	
1992 (H4)	『華のときは悲しみのとき一知覧特攻おばさん・鳥浜トメ物語』(高城書房出版)。県高等学校弁論大会審査員(～17)	いまわの天女(原色派41号)六角形の爪(同42号)	「再び神格化される戦争」寄稿(産経新聞夕刊)。特攻隊や鳥浜さんをテーマにテレビや講演会等で話す。

	略歴	小説	詩・随筆・コラム等（抜粋）
1993（H5）		リトル・スター（原色派43号）目隠し館（同44号）	様々な団体からの依頼で講演が続く。
1994（H6）	同人誌『小説春秋』創刊、編集・発行にあたる。	ファイナル・ホーム（小説春秋創刊号）ミシン（原色派45号）季節に一枚の晴れ着を（同46号）マミヤさま（みなみの手帖73号）	『随筆かごしま』にコラム「言の葉寄せて」連載（～2011）
1995（H7）	鹿児島県芸術文化奨励賞受賞	大学の猫（小説春秋2号）放す（同3号）めぐる暦（原色派47号）聖（原色派48号）	南日本新聞「私の文学散歩」連載（～97） 『歴史と旅』（秋田書店）に「冷酷な実家に示した抗議の断食死　高山城主肝付兼続の妻阿南」など3編寄稿
1996（H8）	小川みさ子（市議会議員・無所属。現県議会議員）後援会会長（～2019）	あしたのジョニー（小説春秋4号）包丁の記（同5号）二月の母（みなみの手帖79号）	石山遊子の名で詩「プラットホーム」「むかしの子供」「弟」（鹿児島県詩人協会編　鹿児島県詩集第4集）
1997（H9）	鹿児島ペンシルクラブ設立、代表を務める。2か月に1回開催。（～2016）	さよならはきらい（遠き姉）（小説春秋6号）ヴィラ・デ・ブリアン（同7号）	『歴史と旅』に「お由羅と島津家御家騒動」寄稿
1998（H10）	放送大学入学。夏、旧満州を52年振りに訪問。共著・監修『鹿児島の女性作家たち』（高城書房出版）に「リトル・スター」掲載	おまる（小説春秋8号）エピローグ（同9号）	
1999（H11）	母と同居し介護（～2001）	店の名はライフ（小説春秋10号）	詩「パンツの匂い」「あみだくじ」（鹿児島県詩集第7集）
2000（H12）		腋の下（小説春秋12号）	南日本新聞「読書」欄に書評連載（～01）
2001（H13）	ペンシルクラブ第100回記念大会開催。かごしま近代文学館エッセイ講座講師（～16）。	残菊（小説春秋14号）	高田チエ子著『夾竹桃の花ふたたび　鹿児島から長崎へ―ある少女の原爆体験記』に著者との対談所収。詩「一世紀の計」「ブラジャーの匂い」（鹿児島県詩集第8集）
2002（H14）	放送大学卒業、大学院へ（中退）。今村学園ライセンスアカデミー表現学講師	寒冷紗（小説春秋15号）	詩「お口のにおい」「行かまほし」（鹿児島県詩集第9集）
2003（H15）		やどかり（小説春秋16号）	
2004（H16）	鹿児島空襲を描いた前田純敬著『夏草』（高城書房出版）の出版を支援		詩「ゆめ一世」「いまさら」（鹿児島県詩集第10集）
2005（H17）	かごしま九条の会設立総会（荒川譲氏らと共に呼びかけ人として登壇）エッセイ集『おそれたまえ百万人の隠れ王を』（随筆かごしま社）	昔きれいだった人（小説春秋18号）	詩「1945年・旅」（鹿児島県詩集第11集）
2006（H18）		ははそばの（小説春秋19号）	
2007（H19）	イオン鹿児島旭屋カルチャーセンター小説教室講師（～17）	六月灯（上）（小説春秋20号）	
2008（H20）	南日本新聞「新春文芸」選者（～2016）。一人芝居『華のときは悲しみのとき』（出演・倖多ひろみ）の原作・脚本・総監督	六月灯（中）（小説春秋21号）	詩「あれがいい」「おとぎばなし」（鹿児島県詩集第12集）
2009（H21）		六月灯（下）（小説春秋22号）	
2010（H22）			
2011（H23）			
2012（H24）	心不全で入院。以後、入院や手術を繰り返す。		
2013（H25）	『相星雅子小説選集Ⅲ＜濃む季節＞』（楠書房）		
2014（H26）	『現代鹿児島小説体系1』（ジャプラン）に「おまる」掲載。		
2015（H27）	ジェンダー史学会春のシンポジウムで基調講演「生活記録から見た鹿児島女性史」5月30日		
2016（H28）	戦争させない1000人委員会鹿児島　呼びかけ人		
2017（H29）			「特攻隊を美化し続けるこの国の病」寄稿（週刊金曜日）
2018（H30）			
2019（H31R1）	3月12日逝去（81歳）		

保澤裕子・松永三重子・疋田作成（2024年1月現在）